

思春期・青年期の発達障害 — 発達障害を伴う大学生への支援 —

講師：追手門学院大学心理学部
中鹿 彰

皆さん、こんにちは。中鹿です。本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。今日は発達障害を伴う大学生への支援ということで少しお話させていただきます。ありがとうございます。

私、今追手門学院大学の心理学部で教員をやっていますけれど、20年程現場で働いていました。京都市の児童福祉センターというところで、場所は二条城の少し北あたりにあるんですけれど、いろいろな子どもへの福祉的な支援をするセンターです。児童相談所とか知的障害者更生相談所、情緒障害児短期治療施設というあまり聞きなれない施設なんですけれど、そういう所で心理判定員として20年ばかり働いて、9年ぐらい前にこちらの大学に来たということです。

現場の判定員ということで、児童相談所では実際に虐待の子どもとか発達障害の子ども、非行の子どもとかもたくさん来られました。そういう子どもたちの支援、そして知的障害者更生相談所では主に知的障害の方、そして自閉症とか、知的障害を合併されてる自閉症の方の支援というかたちで携わってきました。情緒障害児短期治療施設というのは皆さんあまりお聞きにならないと思いますけれども。虐待の子どもとかいわゆる発達障害の子どもですね。虐待の子どもの場合、家で生活することが難しい。お母さんお父さんから虐待を受ける子どもの場合、切り離して生活するという必要があるので、そういう虐待を受けた子どもたちの受け皿です。最近だっ

たら、発達障害の子どもがたくさん入っています。そういう所で判定員として、情緒障害短期治療施設ではセラピストとして虐待の子どもの心理治療をやってきました。そういう中で様々な発達障害とか知的障害の人と出会ってきたわけですが、様々な現場の経験を大学でいろんな形で伝えていくということで、9年ばかり前に移ってきました。

現場ではある意味重い障害の方たちが多かったんですけれど、大学移ってから、様々なまた大学は大学なりにいろいろな関わりと問題があるということを感じてきました。

今日は、私が大学にいてどのように感じたかというあたり、少しお話させていただいて、その後発達障害とはどのようなものか、基礎的な話になるんでご存知の方もたくさんおられると思うんですけど、話しさせていただきます。後、最近なんで発達障害の人たちが増えてるのかということと社会との関係で、私の考えてることをお話させていただいて、そして具体的に大学でどういう発達障害の学生の支援が必要か、支援の体制がどうあればいいのかということと少しお話させていただこうかなと思っています。

最近の大学生の様子なんですけれど、全てが全てそんなわけではないんですけど、30年ぐらい前の大学と比べると授業に集中しきれない学生さんが多いとか、しばらく現場にいて大学もどって気がつくのが、私語が多いのが気になりましたね。昔は授業中に先生が講義されてるときに話すなんて考えられな

かったんですけれど。私語を当たり前にする、そんな授業風景なんでちょっとびっくりしたんですけれど。それと、集中して聞けないと同じように聞いたことをうまくノートがとれない、指示を聞き逃す。何回も言わないと、一回では指示しても聞き取れなくて、何回か言ってやっとわかる。レポートがうまく書けないとか様々な学習場面での、全ての学生さんではないんでしょうけど、昔の大学と比べるとちょっと気になるということがありました。

生活場面でということなんですけれど。変更に対応できないとか友達が作れない、その関係でサークルの人とうまく付き合えない。授業中は授業に出てたらいいんですけれど、授業の合間でどうすればいいかわからない。面接試験が、これは就職につながるんですけど、どうしても大学に出てこないとか昼夜逆転の生活を送ってるような学生さんも。勿論一部なんですけどね、全てというわけではないんですけど、昔に比べると。昔も大学に出て来ない学生もたくさんいたんですけどね、昔はそれなりになんとかやれてたのかなとは思いますが、こういう様々な学生さんがおられます。

様々な問題があるのですけれど、そういう問題についてどう対応すればいいのか。様々な言われてました。本人が怠けてるとか性格の問題だとか親の躰とか本人の不注意とかいろいろと言われてたんですけれど、こういう様々な問題を持っている学生さんの背景には最近発達障害ということが言われてきてます。

今、大学の話してるんですけれど、私が児童相談所にいたころも非行とか不登校の子どもはいたんです。表面的には非行とか不登校に見えるんですけれど、その背後に発達障害ということ、そのころからも言われてました。先程言いましたような様々な問題の背景で、最近発達障害ということが注目されてきた。発達障害のことずっとやっていたので、

発達障害という視点からこういう問題をどうすればいいのかということを考えていきたいと思っています。

最近の発達障害という捉え方ですけれど、昔の障害という枠組みではなかなか理解できないところもたくさんあるのかなと思います。自分が発達障害であるということに気づいていない学生さんとか人もたくさんいて、様々な問題になってから発達障害に気づくとか、もちろん家族も大学職員も気がついてないとか、様々な要因があるのかなと思います。

大学生の発達障害ですけれど、大人になってから発達障害であることに気づかれる人が最近増えてきてます。私が児童相談所とか知的障害者更生相談所とかにいたころは、主に重い人が多かったので、幼少期、早い人は就学前にわかる。学校行ってから、小学ぐらいで障害であることがわかる人が多かったんですけれど、最近は大人になってからわかるという方が増えてきてます。それまで本人も周りも気づかないということですが、様々な要因があるんだと思います。大学まで来られてる方もたくさんおられます。外から障害ということがわかりにくい方もいます。実際に、できることも多い。勉強なんか発達障害の人なんか、人との関係ということでなかなかうまくいかないんですけれども、一人で勉強だったらやれる方もおられます。わかりにくいということで、怠けてるとか努力が足りないとか親の躰がなってないという形で、周りから誤解されて大人になられて、叱られるとセルフイメージとか自己肯定感が低くなって、大きくなっている方もおられるのだと思います。

最近の発達障害、LDとかADHDとかアスペルガー症候群と言われてるんですけども、それまでの障害に比べてなかなかわかりにくい、現実には人数が多いんだと思います。文科省が特別支援教育の調査やったときも6.3%、最近でも6.5%ぐらいと言われてるんです

けれども、これまでの知的障害の人と身体障害の人1%ぐらいと言われてました。それまでだと1%ぐらいだったんですけど、それが6.3%、数的にも多くなったことがあるんだと思います。

また後でお話しますが、現在は、発達障害の人の場合は健常と言われる定型発達との連続体ということが言われてます。だから、どこまでが定型発達でどこまでが障害かというあたりが曖昧というか、以前に比べるとわかりにくくなってるところもあるだろうと思います。障害の捉え方でこのあたりも変わってくるんだと思うんですけど。

それと周りの環境ですね。周りが発達障害の人の、障害というのはある意味特性と言ってもいいと思うんですけど、その人の持っているものについてどう理解するかによって適応状況が大きく変わってくるんだろうと思います。不登校とか非行とか、発達障害の人は虐待を受ける人もたくさんいました。お母さんにしたら、他の子どもと比べて育てにくいというところがあるだろうと思います、小さいころはね。発達障害で虐待を受けた子どもとたくさん出会いましたが、不登校とか虐待、最近はどうつともあると思います。不適応になったら問題が表面化する、というのが一般的にあります。不登校とか虐待とかいうことを細かく見ていくと、その背後に発達障害があるのではないかということが最近言われています。このように近年の発達障害、特に軽度発達障害と言われる人たちですけど、これまでの障害の捉え方と少し違ってきてる、変わってきてるところがあると思います。

ご存知の方もたくさんおられると思うので、発達障害というのはどういうものかということをお話させていただきます。

発達障害、私が考えるには2つ、定義というか捉え方があるんだと思います。LD学習障害、注意欠陥多動性障害ADHD、そして自閉症、アスペルガー症候群の仲間だという、

これが一般的に日本では発達障害という形で言われてます。発達障害の支援法ができたんですけど、発達障害支援法がLD、ADHD、自閉症、アスペルガー症候群を発達障害と定義しますと言ってるので、一般的にこちらが定義されてるんだと思うんですけど。知的障害も含めて日本ではLD、ADHD、自閉症、アスペルガー症候群、2番3番が発達障害と整理されてるんですけど、発達障害の人の支援という立場に立った場合は、もう少しこの1番ですね、知的障害の、も含めてここに広義というふうに書いたんですけど、大きく発達障害という形で捉えた方が、発達障害全般を理解する上ではわかりやすいのではないかなと思ってます。私、ここへ来る前、児童相談所とか知的障害者更生相談所にいたので、そういう視点からもこの知的障害についても含めて捉えた方がわかりやすいのではないかなと考えてます。ただこれは、日本で一般的に言われてる発達障害の捉え方と少し違います。

これ私が作った図なんですけれども。発達障害、今言った知的障害も含めて発達障害というものをどう捉えるかというパターンですけど、ちょっとだけ説明しときます。横の軸がIQです。知的レベルです。横の軸がIQで、知的レベルで、こちらが30、50。ここ70で線引いてます。一般的に知的障害の定義で70というのが基準になってます。70以下の場合には知的障害という定義になってますので、これが横の軸です。縦の軸。横の軸は知能検査でわかるんですけど、縦の軸が発達の偏りと書いてます。後で少し説明しますが、下に行く程発達の偏りが大きくなると考えています。上に行く程発達の偏りが少ない、小さいと考えてもらったらいいです。発達の偏りという書き方をしてるんですけど、自閉症の程度でもいいと思います。下に行く程自閉症の程度が重くて上に行く程自閉症の程度が少ないと考えることができる。社会性の障害の程度でもいいです。下に行く程社会性の

障害が大きくなる。自閉症の程度というのが、一番わかりやすいかもしれないですけど。横の軸にIQのレベル、70を軸に区切って、縦の軸に発達の偏りとか自閉症の程度です。それが重いか軽いかということを図示したものです。これ見ていただいたら、この領域はIQ70以下で発達の偏りが比較的少ない人、自閉症の程度が少ない人というの。この領域が一般的に知的障害の人たちになるわけです。専門的に重度精神遅滞、中度精神遅滞、軽度精神遅滞と言葉書いてるんですけど、知的障害の人たちと考えると面白いと思います。右下になると思うんですけど、IQ70以下で発達の偏りの大きい人たち、自閉症の程度が大きい人たち、この人たちが一般的に自閉症と言われるんだと思います。知的障害も伴う自閉症の人という理解もあるんだろうと思います。そして、IQ70以上で発達の偏りが大きい人たち、この人たちが一般的に言われる発達障害ということになると思います。アスペルガー症候群の人たち。70以下も含んでるんですけど、原則70以上になるかと思うんですけど、70以上で発達の偏りが大きい人たち。特にLD、ADHDと書いてる人、LD、ADHD、そしてアスペルガー症候群の人たち。一応70以上で何らか発達の偏りの大きい人たち、この人たちが発達障害ということになるんだと思うんです。そして、この人たちが最近様々な所で困ったことがいろいろ出てきてる、最近注目を浴びてる、この人たちがさっき言った6.3%の人たちだと思います。

それで、この領域が主に発達障害の領域と考えるとまあいいです。ここに定型発達と書いたんですけど、IQ70以上で発達の偏りもそれほどない人たちが健常とか定型発達の人と捉えられるかなと思います。ここにアインシュタインとビル・ゲイツという名前を書いたんですけど、アインシュタインとビル・ゲイツも、多少発達の偏りが大きい人だ

と言われてます。アスペルガー症候群という診断名がつくかどうかは別として、アインシュタインもアスペルガー症候群に近い特性を持った人だと言われてます。事実そういうこともあったかと思います。このあたりについては、障害と捉えるか、才能、個性と捉えるか、特性と捉えるかが一番難しい領域だと思います。環境で一番左右される人たちだと思います。

発達障害というのは、それまでの障害はIQ70以下の人でIQという目安があったんですけど、発達障害の人たちについては定型発達と、アインシュタイン、ビル・ゲイツなんかも含めてですけど、どこまで障害かがわかりにくくなっていると思います。そのあたりについてはもう少し後でお話したいと思います。

最近言われてる発達障害というのを理解していただいたらいいかなと思います。この3つ知的障害、LD・ADHD、自閉症の仲間ということで、基盤は脳の障害と言われてるんですけど、どこの脳の障害かはまだまだ研究段階です。これも本当に簡単な図式です。上に行く程いろいろなことができる、横の軸は様々な領域と考えてもらったらいいです。算数の力だとか国語の力だとか英語の力、さらにコミュニケーション能力、ちょっと漠然としてるんですけど。これは定型発達、一般的に特に問題なくいられる方たち。そして、青が自閉症・広汎性発達障害。これは模式図ですけど。例えば、国語のLDの人だったら国語だけは落ち込むけれどあとのところは特に問題なくできると考えてもらったらいいです。自閉症とかアスペルガーの人たちの場合はこのできるところとできないところの差が大きいうように考えていただいたらいいかと思います。人の能力をどう捉えるかということ。これなぜ作ったかという、これまでは知的レベルしか人の発達を測る軸がなかったんですね。だからどうしても、定型発達か知

的障害かという、障害というものを理解する場合、この2つしかなかったんです。なぜかといえば、ある能力だけ落ち込むとか場合によってはこの能力の傾きがあるということが、社会で理解されてこなかったという背景があるだろうなと思います。黒と青のところだけではなく、人によって様々な能力差があるということが知られてきたのが、今言われてる発達障害だと思います。これをどう理解するかということになるんだと思います。

発達障害の大きな捉え方というのを見ていただいたんですけど、ここからは各論でご存知の方たくさんおられると思います。

簡単にいきます。学習障害の定義、LD。聞く、話す、読む、書く、推論するのが困難なで、これも脳障害と。他の障害たとえばADHDと合併する人が多いです。大体言われてるのが5%ぐらい、これ人によって統計違います。LDというのは学習障害、日本の教育用語です。実際に診断名で使われるICD-10という、お医者さんの診断では、特異的学力発達障害とか読字障害、書字障害、算数能力障害という診断名がつくことになります。LDというのは日本の文科省の使ってる用語なので、診断名とは違ってます。LDの中でもディスレクシア、読字障害、最初に知られたのがディスレクシアですけども、日本でも最近学習障害LDと言われているようになってきたんですけど、もともと欧米圏がスタートです。欧米の方で文字が読めないとか文字が読めても意味がわからない人たちがいるということが言われてました。それがこのディスレクシアです。これ研究されていたんですけど、なぜ読めないのかがいろいろ言われてて、This is a pen. と読めるんですけど、この人たちは例えばこういうふうに見えてるんじゃないかと言われてるんです。文字が詰まって見えるんですね。このように見えてると。文字が読めなくなってるんじゃないかといわれています。それで区切りを入れる

と読みやすくなると言われてますけれど、この人たちは日本より欧米圏で多いと言われてます、アルファベットの国なので。例えば有名な人たち、トム・クルーズとかスピルバーグがこの読字障害だと言われてます。欧米のこれがLDの元、スタートとなった考え方です。

ADHDにいきます。不注意と多動と衝動性という障害です。これも大体3から5%と言われてます。ADHDの場合はどの報告でも男性に多いと言われてます。自閉症も3対1から4対1と言われてるんですけど、一般的に男性に多いです。女性が目立たないということもあるらしいんですけど、以前に比べるとこの男女比、差が縮まっています。以前は5対1ぐらいと言われたのが3対1ぐらいになってきてるんですけど、男性が多いということが言われてます。そしてADHDはお薬が効くと言われてます。これはコンサータとかストラテラという薬です。多動性、衝動性。こういう薬があります。ただこれはADHDという障害そのものを治療するんじゃなくて、一時的に多動性とか衝動性を抑える薬です。皆さんが、歯が痛くなった時に痛み止め飲まれるのと同じように、コンサータ、ストラテラ飲むと4時間8時間効くけれど、また過活動になる、一時的に抑えるということです。一時的でも、それで物事に集中できるようにということでコンサータ、ストラテラが使われています。

自閉症。皆さんご存知のように社会性の障害とコミュニケーションの障害とこだわり、この3つの障害が自閉症の定義と言われてます。以前は自閉症、1000人に1人ぐらいと言われてたんですけど、最近アスペルガー症候群という形で知的障害を伴わない自閉症の人たち、先ほどのIQ70以上の自閉症の人たち、段々増えてきてるので1%ぐらい、最近では100人に1人ぐらいは自閉症の、広汎性発達障害の方がおられるのではないかと

われます。これも同じように男性に多いです。ADHDと同じで3対1から4対1ぐらい。。社会性の障害で、マイペース、空気が読めないとか相手の気持ちがわからないと言われてます。コミュニケーションの障害ということで、人に自分の言いたいことが伝えられない、抽象的な表現がわからないとか曖昧な表現がわからない、具体的に言ってもらえないとわからないということも言われています。それとこだわり、好きなことはするんだけどいやなことはやらないとか完璧癖がある、スケジュールなんか少し変わるとついていけないということも言われています。社会性の障害、コミュニケーションの障害、こだわりという3つが自閉症、アスペルガー症候群の人の特徴といえると思います。

さっきから連続体というお話してるんですけど、自閉症のスペクトラム障害という考え方があります。先ほども図で少し言ったんですけど、自閉症を、右のスペクトラム紫から赤まであるんですけども、徐々に色が変わっていくんですけど、それと同じように自閉症スペクトラム障害という捉え方、これが中心になるかと思うんですけど、自閉症の人でも重い自閉症の人から比較的軽い自閉症の人まで存在している。重い、ほんとに重度の自閉症、重度の知的障害を伴っている人たちから、軽い自閉症、アスペルガー症候群の人、さらにこっちにはアインシュタインやビル・ゲイツ、特性とか個性につながるような形でいる人たちが存在するんじゃないかと言われてます。1つは自閉症の程度、軽いとか重いとか、もう1つは知的レベルの重いとか軽いとかですね。知的レベルも本当に重い、30とか50ぐらいの重い障害の人からIQ70、100の人、さらにはIQ120、130というアインシュタインレベルの人たちまでおられるという形で、知的レベルの軽い人から重い人まで、自閉症の重い人から軽い人まで捉えていきたいと思いますというのが自閉症スペクトラ

ム障害。だから、自閉症とかアスペルガー症候群といっても一人一人障害の程度が違うとか支援の方法も変わってくるんだと思います。一人一人に合った対応が必要になってくるということにつながるんだと思います。これはアスペルガーの症候群の整理されたものですけど。これはアスペルガー症候群、知的遅れのない自閉症の仲間、人との関係でなかなか難しいというパターンが言われています。大学生でアスペルガー症候群の人の対人面での困難さということが言われてるんですけど、関係つけられないとか会話がうまくかみあわない、そういうことが言われています。自閉症の特性とほぼ同じところですよ。

様々な社会性の障害とかコミュニケーションの障害あるんですけど、それにプラスよく言われてるのは感覚過敏ということがあります。音に敏感だとか光に敏感、色に敏感、視覚的な敏感さ、あと手先が不器用とか、自閉症の人の場合偏食というのがあるんですけど、これも舌の感覚の敏感さとか匂い、触られることをいやがる自閉症の人たちもおられるんですけど、そういう触覚の障害、特に音とか視覚。自閉症の人、全体が見通せないと言われてるんです、視覚的にも一部分しか視野に入ってないんじゃないかとも言われています。社会性の障害やコミュニケーションの障害の背景にある感覚過敏とか感覚的な障害があって、自閉症の人、脳の障害ということが言われてるんですけど、脳のなんらかの障害があっような感覚機能が多少障害されてる、一般の人と少し違っているように言われています。

大学生として発達障害の特性からくる困難さということで、授業に出てこれないのは人の目が気になるとかまわりのざわつきの音が気になるとか、そういうことで授業に出られない、友達との関係でちょっとトラブルがある、あとレポートが出せない、様々な見通しの甘さとか、それが要因で。

ADHD、LD、そしてアスペルガー症候群なんですけれど、合併する人も多いです。ADHDの人だったら学習障害、勉強面も遅れますし、アスペルガー症候群の人だったら多動の人が多いです。小学校のころ、注意欠陥、ADHDの診断名がついて、これらからアスペルガー症候群という形で診断名が変わる人もおられます。そういう意味で発達障害というものを捉えるときに、それぞれのADHD、LD、アスペルガー症候群の理解も大事なんですけど、重なっている部分、大きく発達障害として捉えていくという方向性も大事かなと思っています。

障害というものの捉え方ですけど、最近大学で少しざわついてると、さっきもお話したんですけれど。もともと障害というのは身体障害とか知的障害の人、視覚障害の人達と大体1%から2%ぐらいと言われてました。発達障害、文科省の調査で6.3%ぐらいです。この6.3%の周りに、発達障害の人に引きずられる学生も含めて周辺の学生が10から20%ぐらいいるんだと思います、その外に定型発達。以前は定型発達の人たちとこの1%か2%の障害のある人たち、どちらかだったんです。大体1%ぐらいの人が知的障害・身体障害と言われてて、あとは健常と言われてたんですけども、現在はここの間、グレーの部分がたくさん言われています。それが、現在ではないかなと思います。それが文科省の調査の6.3%という数字に出てきてる。さらに周りに発達障害と連続的な学生もいる、10から20%ぐらい。ここの6.3%ないし10から20、この20~30%の学生ないし人たちをどうすればいいのかが、現在の発達障害が問題になってくる要因かなと思います。以前はこのどちらかであってわかりやすかったんですけれども、最近ここの増えてきたあたり、その人たちとどう関わっていくのか支援していくのかが、現在の発達障害というものの問題かなと思います。

現在、6.3%ないしは10%、20%ぐらいのちょっと落ち着かない学生がいるということなんです。以前だったら1%の障害のある人と定型発達といわれる人と分けられてたんですけれど。なぜそういう中間の支援の必要な人たちが増えてきたのかというあたりを、社会との関係で見ていきたいと思います。

なぜ発達障害の人が増えてきたのか。実際に発達障害と診断される人が増えてきてます。一つは発達障害者支援法という法律もできました。学校では特別支援教育が始まってきてます。発達障害、テレビとかマスコミで取り上げられるということでもよく知られてきたんです。自分も発達障害ではないかということでクリニックに相談に行ったりする。そういうことで発達障害がわかってきたということがあるのかもしれない。もう一つは、現代社会というか昔に比べると、コミュニケーション能力とか対人的なスキルが昔より要求されるんだと思います。多分社会が変わってきたんだと思います。昔は第1次産業ですね。農業中心のときはそれほどコミュニケーション能力必要じゃなかったと思います。その次、工業中心で農業に比べるとこういう能力が要るかもしれないけれど、今と比べるとそれ程必要じゃなかったと思うんです。今は第3産業というかサービス業で、昔に比べるとずっと増えてるんだと思います。そうすると、コミュニケーション能力や対人的なスキルを社会の方が要求してくるんだと思います。昔だったら、例えば農業中心の時代だったらそれ程不適應を起こさない人たちも、最近のように対人スキルが要求されるようになってくると、どうしても社会的に不適應という側面が出てくるのかなと思います。もともと多少人とうまく関われなくてもやれてた社会だったんだと思うんですけど、現代社会自体がそういう能力を必要としてる。そうすると、スキルの低い人たちは社会についていけない。特にこういうのが要求されるのは、大学生

だったら就活ですね。就活のときに面接とかグループ面接されてコミュニケーション能力がどれだけあるかが評価されるわけですけど、なかなか就職にむすびつかないということにもなるんだと思います。

自閉症の人たちは知的障害を伴う自閉症の人たちが中心だったんです。自閉症をはじめて報告したのが1943年カナーという人ですけど、知的障害を伴う自閉症の人たちが中心だったんです。アスペルガー症候群ということで知的障害を伴わない自閉症の人たちが知られるようになってきたのが1つの要因かなと思ってます。発達障害の人たちが増えてきているのかというあたりです。

社会との関係ということで言いますと、個人的な因子と社会的な要因という2つの要因が絡んでくるんだと思います。障害というものをどう捉えるかということともつながってくるんですけど、個人的因子、個人の発達特性と言ってもいいんですけど、ここをどう捉えるか、発達障害をどう捉えるか。個人で持っているのは発達特性です。それが何らかの不適応を起こした場合に障害となる。ちょっとわかりにくいことですけど、個人的因子に困難を抱えていても、例えばインシュタインのように発達の偏りが大きくても社会的にそれをうまく活用して適応してる場合はアスペルガーの診断名はつかないですし、支援を必要としない。逆に個人的因子に困難さは小さくても、不登校とかうつ、こういう状況になってると支援が必要で、発達障害というものを社会との関係で捉えたらどうかということを少しお話ししようと思っています。

発達特性は誰でも持つてる特性です。定型発達との連続体ということを書いたんですけど、誰でも得意なところ、不得意なところあるかと思っています。ただその差が大きいかどうか。さっきグラフ見ていただいたんですけど、その差なんですね。環境との関係というこ

と、特性と。A君とB君という子どもがいます。性格的要因というのは、要するにA君の力と考えてください。こちらB君の力と。例えば算数の力でもいいです。B君だったら70点ぐらいとれる力、A君は30点とれるぐらいの力と覚えてもらったらいいと思います。算数だけじゃなくてコミュニケーション能力と覚えてもいいですけど、この閾値というのは周りからの期待値です。どのあたりを期待するかを閾値という言葉を使ってるんですけど。B君の場合70点ぐらいとる力持ってる彼は50点ぐらいのところを期待されてるんだったらそれ程負担に感じないでやれてる、そういうふうに覚えてもらったらいいです。それに対して、B君70点ぐらいなのにお母さんから80点ぐらいを期待されるとB君の力を越えてしまう。そうすると、結局不適応が起こるんだと思います。どちらも30点ぐらいのあたりに下げるとそれほど不適応が起こらないということなんです。これわかりにくいことなんですけれど、社会からとか周りからその子ども、その人への期待値、場合によってはノルマとかそういう言葉になるかもわからないんですけども、どれだけその人に要求するかだと思います。発達障害というのは期待値の差、逆に言えばどれだけその人の力を周りが正しく判断して適切に関わるかということにつながってくると思うんです、一人一人例えばコミュニケーション能力にしても違うというあたりを理解してかわらないと。現代社会はコミュニケーション能力を要求されます。コミュニケーション能力の苦手な人にもものすごく高い、人前でのディスカッションとか要求するについていけないですね。それぞれの人にあわせたレベルを周りから要求することが大事になってくるんじゃないかと。

発達障害という診断名、どういうことかと言うと、個人の特性というのは個人の発達特性です。個人の持つてるもの。それプラス適応面での障害ということで、何らか実際に

困ってるということですね。不登校とか勉強についていけないとか虐待を受けたとか、場合によっては鬱になる人もおられます。様々な現実面での困難さが、必要になってくるんだと思います。診断をつけるときに、単に持っている特性だけで、先程の図で言いますと、その人の持っている発達の偏りだけで診断をつけるんじゃないかって、どう困ってるかとかどう支援すればいいか、そちらの視点から診断をつけるということが大事になってくるんだらうと思います。適応面、社会の場で何か困っているということですね。学校に出て来られないとか仕事に就けない、場合によっては非行に走る子もいます。そういう社会的な適応面での障害がなくなったら、アスペルガーとかADHDとかLDという診断名も必要なくなるんじゃないのかなという考え方です。小学校のころLDとかADHDという診断とったら、一生涯この子はADHDですと診断つきがちなんですけど。そうじゃなくて、例えば小学校のころ立ち歩くとかだったらADHDという診断名ついてても、大人になったら多動の問題なくなったら、小学校のころADHDという診断名つけても大人になったら診断名なくしてもいいんじゃないという考え。これ一般的にまだそこまでいってないんですけど、一つの考え方です。

私も、ここに来る前に知的障害者更生相談所で、学校で不適応されて療育手帳がほしいということで来られてたんですけど、そのときにはアスペルガー症候群ということで精神科のお医者さんとも相談して療育手帳出したんですけど、その人学校を卒業してから社会に出られてからは比較的うまくいかれてたんですね。そしたら、その方も療育手帳要らないと返しに來られて、アスペルガーという診断名も要らないとおっしゃったので、精神科の先生と相談して一旦アスペルガー症候群ということで療育手帳出したんですけど、もうそういうこともなくしました。この方、

後は普通に社会で働いてます。その方知的な発達は100ぐらい、高い方ですけど、おとなしくて社会への適応が難しい方だったんですけど、そういう事例もありました。経験してますので。不適応があるときはADHDとかアスペルガーという診断つけてもいいと思うんですけど、普通に生活されて社会で働いておられるんだしたら、一生涯ADHDとかアスペルガーという診断名ですけども、検討してもいいかな。これはまだまだ日本で一般的になってる考えではないと思います。例えば小学校のころADHDの人は一生涯つのが普通だと思うんですけど、そういう視点ももってもいいかなと個人的には思ってます。

発達障害とはどういうものかですけど、なんらかの脳の何らかの働きの障害があると言われてます。これに伴っていろんな発達特性、得意不得意とか。発達にはその人の特性があります。この脳の障害、その人の発達特性ですけど、イコールその人の持っている力、能力、発達の偏りと言ってもいいかもしれないです。これイコール障害じゃなくて、それプラスここにあるように適応面での障害、こういうことがあったときに支援のために発達障害という診断名をつけて。例えばアインシュタインですね、この特性持っている人もいます。アインシュタインはあくまで研究して、一つのこだわりがあったと言われてるんですけど、才能とか個性と捉えてもいいんだと思います。発達特性というのは、誰もが程度の大きい小さいはあると思うんですけど持っているものです。だからこれだけを捉えなくてもいいのではないかなと思ってます。

それに伴っての支援ですけど、社会性を高めるとか落ち着く工夫とか、LDだったら遅れへの配慮。一般的に言われてるのは誉めるとか自信をつける。どうしても発達障害の子どもたち、怒られてることが多いです。お母さんから怒られたり、学校の先生から怒られたりということが多いんですけども、やはり

徐々に自信をつけるとか、具体的な対応あると思うんですけど、基本このあたりかなと思います。

発達障害の支援、ここは施策の問題です。ちょっとだけお話しておきます。2007年に特別支援教育が始まりました。「特殊教育」から「特別支援教育」へということで。なぜこういう特別支援教育が始まったかという、丁度このころ、今も続いているんですけど、学校の中にいろんな問題がありました。学力の問題とか虐待、いじめ、不登校などありました。こういう様々な学校場面の問題を解決するために特別支援教育が始まったということです。小学校、中学校、義務教育で先行的に行われて、その後幼稚園、保育所、高等学校、大学という形で徐々に広がっているということだと思います。このときで6.3%です。最近でも6.5%ぐらい介助の必要な人がいると言われてます。これ概念図です。文科省のホームページからとってるんですけど、これまでは1%ないし1.5%ぐらいの人たちが特殊教育の対象でした。これに対してLD、ADHD、アスペルガー症候群、6.3%ね、ここの部分かなり増えたあたりです。このあたりも皆さんご存知で特別支援教育という、対象が増えたということとこういう取組みされてますということです。そして、こういう発達障害の人への支援、さっき誉めるということを言ったんですけど、イギリスの自閉症協会が自閉症、アスペルガー症候群への基本姿勢ということで言ってます。どういうふうな関わりをすればいいのかということです。SPELLの原則と書いてるんですけど、一つは構造化です。できるだけわかりやすい環境を作るとのこと。Structure、視覚化とか構造化、さらにはスケジュールを作るというような形での視覚化、構造化が言われています。わかりやすい環境ですね。その次、Positive。さっき言った誉めるとか叱らない。これなかなか難しいんですけどね。その

次、Empathy。共感するという。視覚化、構造化というのは最近知られてます。そして、誉めるということが最近よく言われてきてるんです。さらに発達障害や自閉症の人たちの気持ちを理解するという、ここは必要になってくるんだと思います。その次、刺激を少なくするという。やはりさっき言った自閉症の人たち、感覚過敏があります。音の過敏とか視覚的な過敏ね。情報がうまくコントロールできないということがあります。だからできるだけ刺激をコントロールするような環境を作るとのこと。

そして一番最後、関係機関の連携ということだと思います。Linksと書いてますけどね。小学校だったら小学校だけで問題を解決することはできない。長い目で見ていく必要もあります。だからできるだけいろんな機関とか周りの関わる人たちが協力しながら支援していくという、一人での支援というのは難しいことだと思います。協力したチームでの支援という形です。これがイギリスの自閉症協会が言ってる、一般的に自閉症の人への関わりの方針ということ。こういう関わりを長く続けていく、グループでということ。

次のところは今のところを具体化したものです。具体的に聞いていくとか、さぼってると見えてても背後に発達障害があるんじゃないとか、一番下に長期的な視点と書いたんですけど、やはり将来自立ということが大事になってくるんだと思います。今すぐ変えようというんじゃなくて、少し長い目で見てその人の将来の自立を目指す、自立のために今何をすればいいのかというあたりから関わっていくということになります。

これは先ほどとほぼ同じです。自尊心とか自己効力感とか誉めていくとか、それと具体的に指示する。受容的アプローチと指示的アプローチと書いてあるんですけど、具体的に、発達障害の人の場合指示するのが大事です。こうしなさいとはっきりすることが大事

ですけれど、指示すると同時に、さっき共感というのがあったと思うんですけど、受容的、ある程度その困難さを理解していくという、その指示と受容、共感とのバランスが大事になってくるんだと思います。

これも応用なんですけれども、学習支援、就労支援につなげるとか、保護者との連携とか。大学生の場合、発達障害と診断名がついてる学生もいるんですけど、診断名がついていなくても6.3%の周辺の10%、20%の、診断名がついているわけではないけれども何らかの配慮が必要な学生がいるということの理解も必要となってくるんだらうと思います。

これは教育の場ですけれども、授業中でユニバーサルデザインのわかりやすい授業をするとか、そうすると発達障害の学生だけじゃなくて全ての学生にも応用できるとか。あと視覚優位とか感覚過敏があるので温度調節をやります。それとか資料の配布とか活動の見通しとか、場合によっては聞き取りの困難な発達障害の学生の場合にはICレコーダー、パソコンの持ち込みを認めるという考えも必要になってくると思います。診断を受けてる学生、診断を受けてない学生、どちらにしろ丁寧な個別の関わりを行うことによってかなり変わってくるものだと思います。

ここから参考なんですけれども、大阪府に発達障害者支援センターというところがあります。アクトおおさかというところ。そこで関わり方とかPDFのダウンロードが可能です。それと国立の特別支援教育総合研究所、こちらにも資料があります。これが大阪府のです。PDFがあります。そしてこれが特別支援教育研究所です。アクトおおさかで検索していただいたらすぐ出てきます。Googleとかで検索していただいたらこの資料がダウンロードできます。ここに詳しく書いておられるのでまた見ていただいたらと思います。

大学での支援の体制作りで、大学では初年次教育と就労のときのキャリア教育、この

あたりが重要になってくるんだと思います。様々な大学内で学習支援室とか勉強に対する支援とか心理的サポートで学生相談室、本学にもあります。学習支援室、学生相談室、これらをうまく活用して支援していくということになるんです。

これで最後ですけれども、日本での法整備を少しだけお話しておきます。障害者基本法が2011年に改正されて、障害者権利条約、これ国連では古く採択されてたんですけど、2014年、かなり後になって日本も批准しました。そして、障害者差別解消法が作られて、来年から施行されます。こういう権利条約の批准とか差別解消法という法律ができます。そういうことによって、今後社会の中で発達障害の人の理解、支援も国も法的にもすすめようという考え方です。差別的取扱いの禁止というのが以前からあったんですけど、これも行政でも民間でも法的義務です。そして特に追加されたのは、合理的配慮不提供禁止、ようするに発達障害の人にはそれに合った対応をしなければならないという。例えば試験時間の延長とかそういうことです。今までも視覚障害の人とかには配慮されてたんですけど、発達障害の人には入試の場合あまりそういう配慮なかったんですね。ところが今後は「発達障害です」とおっしゃってた場合には、その障害にあって、たぶん時間を長くするとか文字を大きくするとか様々な合理的な配慮が今後必要ですというあたりです。もう大学入試センターではやっています。試験時間の延長とか解答方法を変えると文字を大きくするとか場合によっては別室での受験ということもやっています。こういうふうな合理的な配慮が社会でも今後必要になってくるということです。これ、様々な大学でどういうふうな配慮してるかというのを挙げたものです。

もう最後。様々な大学で先進的な大学があります。本学でも学ばなければならない大学ですけれども、富山大学とか信州大学、こうい

う大学では発達障害の学生支援のために先進的にいろんな体制作りをやってます。関心のある方、大学のホームページを見ていただいたらどうしているかということがたくさん書いてます。

参考文献を挙げました。こういう形で大人の発達障害の人とか大学生の発達障害、近年特に注目されてきたところですよ。まだまだ過渡期で今後の課題になるかなと思うんですけど、ご関心のある方、このあたりを参考に読んでいただいたらと思います。

どうも長時間ありがとうございました。以上で私の話は終わりたいと思います。